



ち え の わ

Vol. 18

タップ・ダンス

会員 若林 擴

皮靴底の「トウ」と「ヒール」にメタルを取付けて硬いフロアに叩きつけ、リズムカルに音を出しながら踊る打楽器的なタップ・ダンスは、1830年代のアメリカに渡ったアイリッシュ・ダンスとアフリカン・ダンスのフュージョンから生まれ、1900年から1955年に掛けてアメリカのブラックたちが盛んにしたダンスの形式であると言われている。

ボードビルの舞台などに登場し、“Bojangle / ボウジャングル” (大騒ぎ) のニックネームを持つ、ブラックのビル・ロビンソン (本当の名はルーサー、ビルは嫌がる弟の名前を盗ったもの) などのタップの大スター達が、禁酒法の時代、有名なハーレムのナイトクラブ「コットン・クラブ」で生まれた。初期のミュージカルではフレッド・アステア、エリノア・パウエル、ジンジャー・ロジャース、ニコラス・ブラザース、ドナルド・オ’コナー、アン・ミラー、ジーン・ケリーなどがタップ・ダンサーとして知られている。

1989年11月7日、ジョージ (パパの方) ブッシュ大統領が、5月25日をナショナル・タップ・ダンス・デーと定めた法律に署名した。5月25日はBill “Bojangle” Robinson の誕生日だからである。サミー・デービス・ジュニアは彼のショーの中で、哀愁を込めて “Candyman Mr. Bojangle” (タップの大スターであったが一文無しで死んだビル・ロビンソンのこと) を歌いながらタップを踊った。

サミー・デービス・ジュニア、映画「コットン・クラブ」(1984年)で踊るグレゴリー・ハインズなどのブラックのダンサー達はフォーファー (リズム・タップ) で、シティーの中の貧しいエリアで足踏みだけで踊るダンサーであった。ジンジャー・ロジャースと組んで映画「シャル・ウィー・ダンス Shall We Dance ?」(1938年)などでタップを踊るフレッド・アステアは、上品なボール・ルームダンサーであった。もともとバレエ・ダンサーであったジーン・ケリーはレスリー・キャロンと「巴里のアメリカ人 An American In Paris」

(1951年)で、デビー・レイノールズと「雨に歌えば Singin’ In The Rain」(1952年)で、彼はバレエの全パートにタップ・ダンスを組み込んだ。

小錦やビートたけしが踊れるなら、たとえ体重が88キロでウエストが1メートルと4センチとなった私にも出来ないわけではない。何時かは舞台に立ちたいと、先ず渋谷のバレエ・ダンス用品のチャコットに注文して、写真のようなタップス (皮靴底の「トウ」と「ヒール」にネジ止めするメタル) を取り寄せ、舞台用のエナメル・シューズの皮靴底に取り付けさせた。

練習用のシューズは、写真のように、スタジオの柔らかいフロアを傷付けないで、軽い打撃音が出るように工夫した。ラバーソールのモカシン・シューズの「トウ」と「ヒール」に、片側に立ち上がり部を作ったアルミのプレートを接着した。

動きの早いタップ・ダンスは、スローなHULAより私に合っているかも知れない。タップはジャンプが辛いだけで、左右の足に体重移動さえ上手くゆけば、テンポが早いだけにHULAよりステップは呑み込み易い。

昔懐かしいナット・キングコールの「Love」に合わせて、左右の足に体重移動させ、片足づつ、シャッ





フル・シャッフル，ステップ・ステップ，後ろにマンボ・マンボ，ジャンプ・ジャンプ，トゥ アンド ヒールが出来るようになれば，タップなんかは簡単・簡単，の筈が，先ず片足で立っているだけでも大変。

HULA の時はほとんどが正面の鏡を向いて踊るので気がつかなかった体の厚みが，タップでは身体をひ

ねって横にターンしても顔は常に正面を向くように指導されるので，鏡張りのスタジオに映る1メートル4センチの胴回りの厚みを，否応なく目にするようになる。道理で近頃着物の帯が短くなったわけだ。

間違いなくメタボリック・シンドロームだ。タップを軽やかに踊るために，今年健康診断でウエストをチェックされるまでも無く，先ず10キロの減量とウエストを20センチ絞ることにする。フラ・ダンサーからタップ・ダンサーに変身だ。

6回のレッスンで曲りなり「LOVE」のステップを覚えた。後はこれをいかに洗練させるか。フレッド・アステア系のボール・ルーム・ダンサーの優雅なタップを目指しているので，極めのポーズにはシルクハットを買わなきゃなるまい。

「LOVE」の次は念願の，ジーン・ケリーのタップ，「雨に歌えば Singin' In The Rain」だ。いよいよ映画の中のジーン・ケリーように雨傘を相手にタップだ。